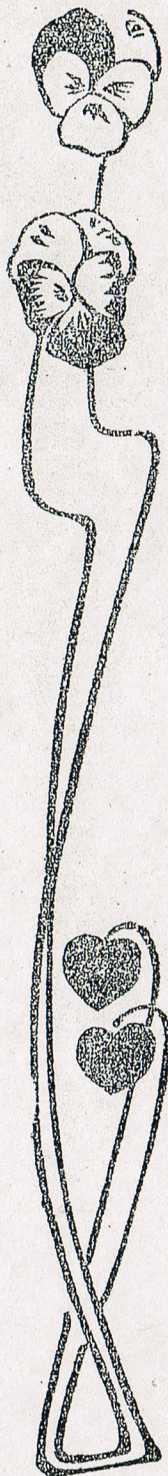


短篇小説



「天」侮辱

東京岡田美知代

學校に居るうちは何につけ彼につけ、不平だらけ、こぼしてばかり居たものも、一度去つてそれ、社會へ出て見ると、流石に母校可憐しさの堪へ切れぬもので、同窓生とし聞けば、つひに一度顔見合した事さへ無い仲でも、最う直ぐ打解けて、他人では無いやうな氣もしますのて。

或る夜の事、神樂坂迄買物しての歸途、いろはの前でふと津村さんに行き合ひました。此人は以前私が神戶女學院の豫科に居た頃、もう餘程の上級生で、金縁の眼鏡などして、ことさら袴は着けず、見たところいやに取澄したやうな様子の人でしたが、其頃私の部屋

頭であつた高等科生の山家悦子とは非常に親しいなで、よく部屋へ出入りしては、自然私にもやさしく、それに以前同志社に於いての頃、私の従姉と知己であつたとか云つて、種々お世話にもなりました。

「アラ、津村さん！」

行過ぎようとして斯う呼掛ますと、立止つて、度の強い昔年らの眼鏡越しに、凝然と私の方を透し見て、

「河田さんだよまあ！ 本當に久らくです事、御上京の事は「めぐみ」——同窓會誌——で見てましたけれどお訪ねもしませんで……此節は何處に被居います？」

「え、あの辨天町四十二番地、伊澤つて家に居ますの」

「オヤ然うでしたか、それぢや目と鼻の御近所、私は矢來の四番地です、南樓町の教會の直ぐ傍で、山家さんと御一所に家を借りて。弟と三人吞氣に自炊してますの、それに近日神戸から清水さんが出て來て、矢張

り一所に住む筈ですから、何卒時々遊びにいらつしやいな、是非待てますわ」と云つた調子で、其の夜はその儘別れましたが、何とては知らぬ愉快さに胸も波立つて、道すがら樂しかつた女學院時代を思ひ出し、獨りて莞爾、幾度と無く微笑むのでした。

清水千香子とは十四の春入學そも、からの同級生です、お互ひにまだ肩あけも澤山に、小柄なお千香さんは腰あげさへして居て、丹波産れの、わけても言葉の可愛らしい人、無邪氣でそ、つかしやで、何時でしかか、寄宿舎の裏手のパンど、家から火が出て騒いだ時など、平常から鬚のこわれぬ



やうにと、頭に枕をくくりつけて寝て居た事も忘れ、周章て、起きて、其儘大勢の人中へ飛び出し、後で大笑はれした事もありました。達から面白い娘だと喜ばれたが、山家悦子との仲は格別で、其頃學校では誰云ふと無く、二人の事をチャレストと呼びまして、果ては何か忌はしい、怪しい關係でもあるかのやうに云ふらす者さへありました。

實際血を分けた姉妹でもよもや斯うまでとは思はれる位の親密さ、足袋から襦袢から、洗濯物は皆なち千香さんが一人て引受けて、虚言か本當か、肌を巻くものさへ二人は一所だと聞きま



したが、其位にして居てさへも、不機嫌な旦那と云つた調子で、疳癪持ちの山家さんは随分と無理難題を並べては、お千香さんを泣かしたり、八當りしたり、とお千香さんとても然う／＼黙つてばかりは居ず、時には飛び掛つて胸倉を執るやら、帚で撃ち合ふやら大騒ぎするので、くれ共その直ぐあとから耳語して、莞爾うなづき合ふと云つた有様。

山家さんの出京は此春頃、最う半年も其上も前の事で、卒業後を母校に止まり、久しく數學植物學を受持つて、リール院長の大お氣に入りでありました。それで月々の費用は、學事視察と云ふ名義の下に學院から仕送る事になつて、病氣保養かた／＼、此處一兩年は東京に被居るのだと聞きました、お千香さんとの別離はそれは哀れなものであつたとは、其當時神戸の友から嘲り半分、判官靜別れの場とても云ひそな滑稽な文句で、委しい手紙をよこして居ましたが、可哀相に二人は堪らなくなつて、呼び寄せたのか、後を追ふたのか、今度愈々出て来る事にもなつたのでせう。其次ぎの日曜日、ことによつたら最う清水さんが来て居るも知れぬと思はれるので、教へられた教會の生垣を曲つて、矢來の四番地に來て見ると、尋ねる迄も

と津村さんの注意。

それから何は無くとも、久々振りて御一所にとすゝめられるまゝ、私も手傳つて揚出しをしますやら、弟さんと合せて五人、一つの卓に御夕食を頂いて歸りました。弟さんは早稲田の生徒で、其英文科卒業も來年だとか、敏さんと云ふ名前です。

清水さんは英學塾に通ふ事となりました。

二十日ばかりして二度目に訪ねた時には、津村さん兄弟は留守でして、山家さんが怒り怒つた顔してひかえて居る前に、清水さんは眼を眞紅に泣きはらして居るのです、斯うした光景は以前よく見馴れて居ますので、又例のとばかり、何故二人は斯うかと結句可笑しくも思ひましたが、黙つて居る譯にも行かず、

「一體まあ如何なすつたの？」と聞きました。

と暫くして投出したやうに清水さんが、

「私ね、今日から他家へ行きますのや。」

「え、何故？ 此處に居たら好いぢやありませんか。」

「然うかて、山家さんが居たら不可んて仰有るもん。」

「何故でせう、可笑しいぢやありませんか。」

「此處に居ると墮落の恐れがあるのやと、敏さんと口利いたりするよつて——」

無く、柴垣を廻らして、割合に小奇麗の家の、門には津村と表札が出て居ます、格子戸を開けて玄關で、おなふと、出て來たのは弟さんでせう、津村さんによく似て背の高い、髪を分けた細顔の、二十四五で一寸と風采のいい人です。

「あの津村さんはいらつしやいますか、私河田と申します。」

「居ますよ。姉さん！」と奥を覗いて「お客様だよ。」

「オヤ被入い。サア何卒、清水さんも來てますから。」

と津村さんが出て來て奥へと導く、導かれて行くと六疊の室の中央に据えられた卓に凭つて、讀書して居るのは山家さん、清水さんはその横で編物をして居ましたが、此方を見るなり、

「あれまあ貴嬢、河田さんやないか！」と起上つて、

さも／＼可憐し相に手を執り、挨拶しようとするれば、

「そないな事置いとくなはれ、此方は書生流が好きやよつて。」と相變らず仇氣ない。

暫らく話して居るうち、勝手口から豆腐屋がのぞくと清水さんが起つて、臺所の戸棚を開けにかゝる。とまた、

「お豆腐屋さん、序に柏子木に切つといて下さいな」

「何てすか、お千香さん！」

山家さんは白い眼をしておろり、以前は此一晩で黙つたものですが、

「然うかてあんた、一つ家に居て口利かないやうには出來んし、折角監督して下さる山家さんに氣揉ましても濟んから、それに私かて痛も無い腹さぐられるの嫌やもん、出て行くわ、出て行くけど晩迄、せめて津村さん二人が戻て來る迄待つて欲しいと……」

「まだ左様な事云つて、何故此頃は斯う惡摺れておいでだらう、私の云ふ事なんぞ些少も聞かなくなつて、本當に困つちまう、折角父様から頼まれて、萬一の事が有つて御覽なさい、お郷里へ對して申譯ないぢやありませんか、私の氣にも成つて頂戴、ねえ河田さん、私の心配するのが無理でせうか。」

「ですから最う行くて云つてますがいな」

押入れから袴を取出して、次ぎの室へと起ちました。

「塾へても移るんですか。」

「いゝえ、番町のね、私の知己へ預ける事にしましたの、つひ最初何の氣も無く此處へ引取つたものですから、詰り私の落度なんですよ。」と次ぎの室を憚つて、小さを聲。



「歸らうとしますと、直ぐ歸つて来るから是非留守して居て呉れるやうに、若し又津村さんが歸つて来たなら、一寸と其處まで二人で買物に出掛けたと、然う云つて呉れと山家さんの頼み。而して斷るのも聞かず、ずん／＼出掛けて行くぢやありませんか、仕方が無いのでとんだ處へ來合したものと、心配して居りますうち、幸と山家さんが早く歸つて呉れて、虚言だけは吐かないで済みましたけれど、一足違ひに敏さんが歸つて來て、書齋へ行きましたか、

「山家さん！」

と出て來た時の様子と云つたら、それは穩かならん面色をして、私は思はずとしました。

「貴嬢は何故、何故僕を侮辱するんです」

「侮辱？ 私かね？」

「まあ何を仰有るの、そんな覺えは有りませんよ。」

「覺えが無いつて何です！ 僕は知るまいと思つても駄目、お千香さんは置手紙をして行きましたぞ。」

「而してそれが何故侮辱でせう。」と冷かに澄して云つて、口元に妙な微笑を浮べるので、敏さんは一寸と行

き詰つた様子でしたが、

「侮辱でなくつてさ、實に大なる侮辱、侮辱で無いな

ら、何故殊更僕の留守にしたんだ？」と急ぎ込んで、

「サア、お千香さんは今麴町の何處に居るんです？」

「敢て云ふの必要ありません、私はこれでお千香さん

を監督の責任がありますからね。」

「フ、ン、監督か、自分の監督も碌ずつぽ出來ない癖

に、よく云へた。」

「何ですつて？」

「流石に今度は山家さんも氣色ばんだ。

「良心に聞いて見れば好いつて事さ。」

「相手にはならんと云つた様子で、突然帽子を執つて

出て行きましたか、其の傭けな下駄音が段々幽かにな

るにつれて、山家さんの面色は淋しく、眼には異様の

濕をさへ湛えたが、急に又氣を變へて、

「ねえ、河田さん、ゆつくり遊んでつて頂戴な、今晚

はお千香さんも居なくなつて淋しいんですもの……

「ね可いてせう、其代り澤山御馳走しますわ。」

「え。」と答へて、私は俄かに夕暮の薄ら寒さを覺える

のでありました。

此れはくらうとの作として檜舞臺へ出しても耻かしくないもの、臨

分複雑したなりゆきをこれまでに縮めた技倆、讀んで笑はせるやう

な處のある技倆、對話のいき／＼して居る技倆、上方言葉を上手に

あやなした技倆、暗黒の、苦痛のと批評の大斧を眞向から振擧さなけ

れば始末のつかぬやうなものばかりが好い作とも限らない、批評を

しやうと思つて讀んで居るうちに批評を忘れて了うやうなのが眞の藝術品かも知れない、選者は何の理屈もなく、欣んで此作者に月桂冠を擲ぐ(評)